

ワタナタムとは何か…… 東北タイ・ダーンサーイの霊媒の問い

レヌカー・M[†]

What is Culture? the Question of the Media of Dansai, North-East Thailand

Renuka Musikasinthorn

Before a congregation of a few thousand people in the middle of the ceremonial hall of Ho Luang, this question was posed by Chao Pho Kuan, the male media who commands the respect of the villagers in and out of Dansai, a district in Loei Prefecture. Culture is a term of abstract nature. One does not usually expect a villager of spirit cults to utter such a word. But he did. The question and his answer to it carry rich and deep connotations. Without knowledge of geography, history and social anthropology of the area as well as a bit of patience, one can hardly understand them. Kindly read, if possible, the Introduction by E.R. Leach in *Dialectic Of Practical Religion*. The book, which was edited by Leach and published more than 40 years ago, may not be directly relevant to this article, but it could shed light on the intellectual stance of its writer.

1. はじめに

ローイ県ダーンサーイ郡ダーンサーイの精霊祭祀場ホー・ルワンで年に一度の村の守護霊の供養（リヤン・ピー）が行われていた。タイ暦の第七の月白分の第九夜と定められた供養の日は、今年（2011）は6月10日にあたった。近隣の村人たちに加え、遠くから馳せ参じた信者たちは祭祀場にあふれ、周辺の草原を埋めていた。そこで、霊媒チャオ・ポー・クワンが大声をあげたのである。

「ワタナタム・クー・アライ（ワタナタムとは何か？）」

霊媒には守護霊が憑いている。ワタナタムとは何か、という問いを発したのは、ダーンサーイを守護する貴人の霊（ウィンヤーン・チャオナーイ）の中でも、最高位にあるチャオ・ムワン・ワンであった。

ワタナタムは英語の *culture* と同意義とされ、日本語では文化と翻訳されている¹。文化という言葉の延長線上には、文化人、一昔前なら文化住宅、文化トイレがあるであろう。一方で、精霊信仰、守護霊、霊媒とつらねただけで、前世紀の遺物というイメージが浮かぶであろう。またダーンサーイという地も、首都バンコクから遠く離れた東北タイもラオスと国境を接する辺境の地である。そのような山里の祭祀場で守護霊が霊媒に、このような抽象的な言葉を発させるとは…こう書いただけで、「場違い」、「伝統的な精霊祭祀の儀礼のコンテキストから逸脱」という声が聞こえてきそうである。その

[†] アジア太平洋研究センター特別研究員

場に集まった村人、信者たちの生活感覚に根付かない言葉を「文化づいた」霊媒が口走ったと誤解されるかもしれない。

ダーンサーイで現在チャオ・ポー・クワン（男性霊媒）の座にあるターヴォーン・チュアブンミー氏は本年60歳。学歴も50年前のダーンサーイの村人の平均的なもので小学4年卒である。ホー・ルワンの内外に詰めた1000人を超える信者たちもまた、学歴においては同じかそれ以下であっても不思議ではない。この場、この時、この人たちを考えた時、文化だの、伝統だのという抽象的な語彙を用いること自体がナンセンスと思う方もあるであろう。

しかし、この問いは確かに発された。しかも、筆者が祭祀の場で霊媒の口から「ワタナタム」（文化）という言葉聞くのはこれが初めてではなかったのである。ダーンサーイでは「ワタナタム」（文化）という言葉はごく日常に耳にし、口にされる言葉である。

村の開発リーダーでもある霊媒チャオ・ポー・クワンは、自分が在家者代表ををつとめる仏教行事の際や自分が主役を務める精霊行事の前後に、村人を相手に講話風の話をするが、そこでは「ワタナタム（文化）」という言葉は「プラペニー（伝統）」という語とともに頻繁に口にされた。これらの言葉に、霊媒はどのような意義を持たせ、村人たちはどのように理解しているのだろうか。

「文化」だの「伝統」だのと、抽象的言葉を霊媒が発するダーンサーイの精霊信仰儀式に参列して、筆者が訝しさを覚えなかったと言え、それはうそになる。確かに、はじめは驚いた。しかし、何年かダーンサーイに通った今では、霊媒が「文化」という語を発する脈絡が分かり、それが決して村人の生活から宙にういたパフォーマンスではなく、信仰の実践から生まれた言葉であることも理解出来るようになった。東北タイはローイ県のダーンサーイで使われる「ワタナタム」という語は、筆者が暮らすバンコクもスクムヴィット地域のタイ社会でのそれとは違う脈絡で使われ、違う意味を持って理解されているという状況も理解するにいたった。

その「文化」を背景に、ダーンサーイで実践されている精霊信仰を筆者が理解するなりに記述してみたい。ダーンサーイの地域社会とタイ国家行政組織との関わり、特に文化行政の光に照らして、「文化とは何か」という霊媒の問いを解釈してみたい。こうした試みによって、ダーンサーイにおける精霊信仰の現況に幾ばくかの光を投げかけることが出来れば…という思いが本文の趣旨である。

2. 調査地の概要

2.1 地理：関の町ダーンサーイ

ダーンサーイの地理の概要を述べよう。

ローイ県ダーンサーイ郡は、東北タイ地方の西北端。北緯17度から17度30分、東経101度8分から12分に位置している。海拔357 mの高さである。

ローイ県庁所在地から国道203号線を西へ進むと、稜々たる峰が緑の裾野をひろげて連なる壮大な景観が続く。プールワ郡の山々である。山波が小さくなり近くにせまってくればコークガームの別れ道。2013号線に入れば、15キロでダーンサーイ郡庁所在地である。ローイ県庁所在地からは85キロの距離である。

ダーンサーイは山間地である。東北タイ高原からの旅人は南の行く手を阻む高山の姿に、チャオプラー水系への分水嶺に登る難路の緒に立ったことを知るであろう。西南のピサヌローク、あるいは

南東のペチャブーンから曲がりくねる山道をたどって、はるばると旅して来た者は、眼下にダーンサーイの町を見下ろす峠に立って、彼方に続く山並みにメコン河への到達は今しばしと悟るのだ。

ダーンサーイは山に囲まれてはいるが、その景観は秘境とか、隠れ里という印象を与えない。

郡庁所在地を南北に割って流れるマン川の橋上に立って、四方を見渡してみよう。

マン川（ホウエイ・マン）はペチャブーン山塊のプーヒンロンクラオ山の北峰プーロムロー（1445 m）を水源として北に流れ、絶壁を降りて、ダーンサーイ郡庁所在地の南端に達し、西北からのホウエイ・ナムパーン（パーン川）、ホウエイ・ナムウ（ウ川）、東からのホウエイ・ナムソク（ソク川）に合流する。全長25キロの小さい川である。川幅は季節によって変化するが、自然堤防とその上の段丘を越えてまで水が溢れることは滅多にない。1年を通じて、この川に船が浮かぶのを見ることもない。

ダーンサーイ郡は10のタムボン（行政村）から構成されるが、そのうちの8村がマン川沿岸にある。ダーンサーイ郡庁所在地の地図を見ていただきたい。（地図1）まさにマン川あつてのダーンサーイであることがお分かりになるであろう。ダーンサーイの誇る名跡シーソンラク仏塔はマン川の川曲がり、ウ川がマン川に注ぐ淀みに立っているし、旧刹ポーンチャイ寺はソク川とマン川の合流点にある。町の中心の市場前には鍵形のため池や盲腸のような氾濫池が残る。山から流れ出る溪流（ホウエイ）の集まる地ダーンサーイに、かつて多くの水たまりや湿地があった痕跡である。ダーンサーイ郡庁所在地において、平地は村の祖霊の森から郡庁へ向かうほんの1キロの間のマン川の氾濫原だけである。

南西の祖霊の森近くから国道2013号線をバーンデーの交差点で横切り、郡庁前まで南北に続くのはプラ・ケオ・アサー通りである。通りは街の中ほどでマン川を渡って、さらに北の郡庁前まで続く。かつてチャオムワン（国守）の屋敷があったあたりだ。橋下を流れるマン川は東に曲がり北に向かう。プラ・ケオ・アサー通りの東側に並ぶ家の裏は、川岸だ。河向こうには、水田がひろがっている。

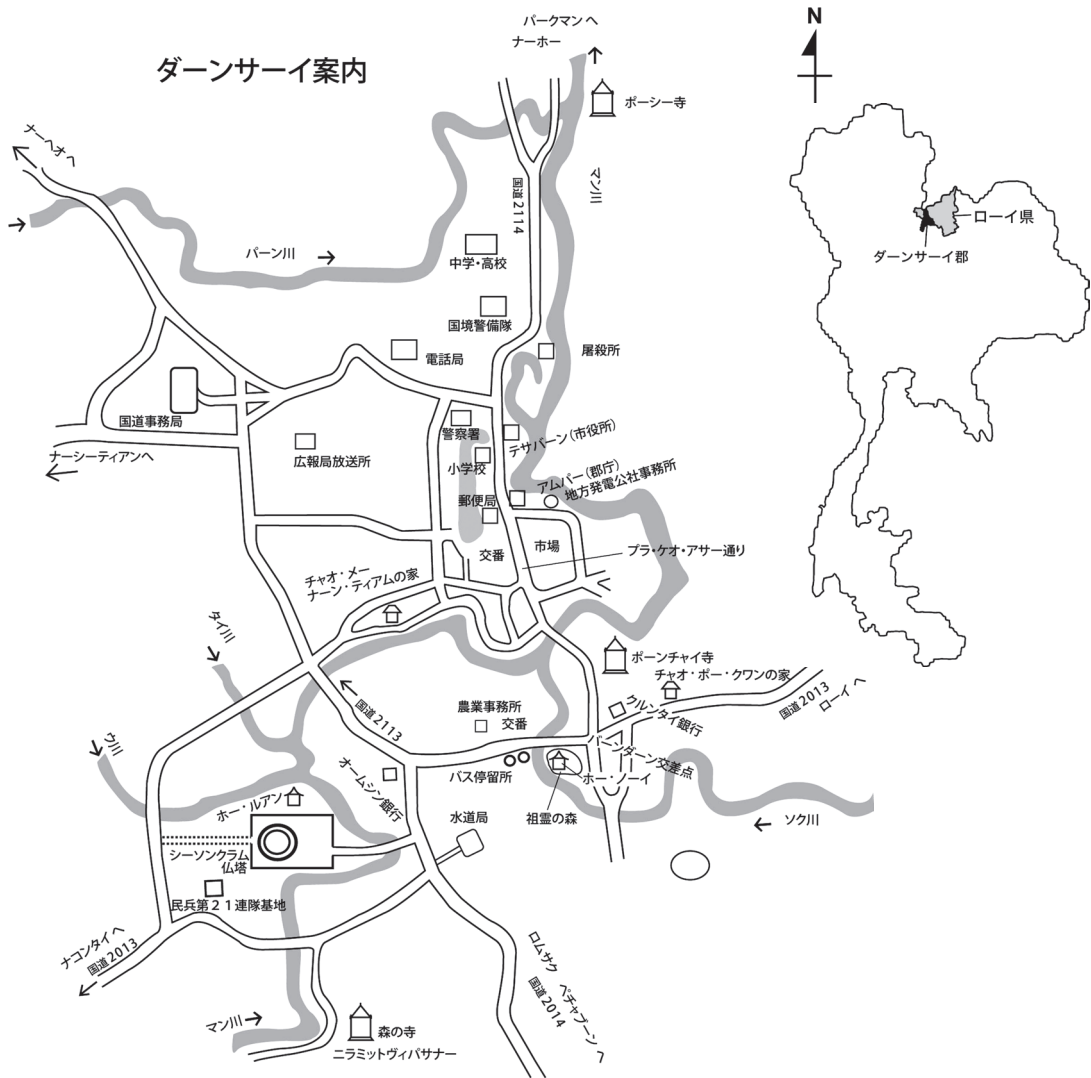
プラ・ケオ・アサー通りから西の山麓に向かって、幾つかの小路が分岐している。段丘を上り、低いテラスに並ぶ家々の後ろは、もう山麓である。北西には距離をおいて、ルアン・パパーン山塊の山々が望まれる。晴れた日なら、西にプールワ山の船型の頂が見えるかもしれない。南にはペチャブーン山塊が迫っている。

マン川は郡庁の背後を通って北に向かい、ヴィエンの丘を越えると、のびやかに平野を流れる。ナーヴィエン村から北は、川筋に点在する村の周囲に水田が耕されて広がる豊かな景色が続く。ダーンサーイ郡を構成する10村の中でも古くからの集落はナーホー村など水田に恵まれた、マン河下流域にある²。それ以外の村は山麓の斜面か、山間地にある。ダンサーイ郡には平地は実に15%しかないのだ³。

バク・マン（マン川口）でマン川はホアン川に注ぐ。河口の向こうはラオス人民共和国である。

ダーンサーイ郡を潤す、あと二つの川はブン川とパーサク川である。ブン川はペチャブーン山塊のトンテン山から流れ出て、南に向う。ロムサクから国道203号線に沿ってダーンサーイに向かう際、道路の左手に流れているのがブン川である。

同じ山塊から発し、同じく南に流れるのがパーサク川。水源はダーンサーイ南部の山岳部のプーク



地図1

ワーン山で、ワーンヤオ村に下りて、南に流れる。パーサク川はペチャブーン、サラブリーを經由してアユタヤでチャオブラヤー川に注ぐ。ダーンサーイは、チャオブラヤー流域に入っているのだ。

西及び南西の山の彼方はナーン川流域で、ナコンタイを經由して古都ピサヌロックに通じている。北東にはホワン川のなだらかな流れの先に、大いなるメコンが横たわっているのだ。ホワン川をわたっても、メコンをこえても、ラオス入国は簡単だ。

川筋を伝わっていきさえすれば…輝かしい新世界に出られる！メコン、パーサク、ナーンと三つの水系の川の世界につながるダーンサーイは、開かれている。この地理条件は街道上の関としてのダーンサーイの歴史をつくった。

ダーンサーイのダーンとは「関」という意味である。タイ全国各地にダーンのつく地名を持った「旧関所」が多々ある。タイ国陸軍地図局博物館に所蔵された東北地方の古地図⁴は18世紀末から19



地図2 ラタナコーシン（バンコク）時代初期の戦争時の行軍用地図

点から点まで何日かかるかと記してあるが、その点がダーンである。ダーンサーイはナコンタイからの道とロムサクからの道が出会う地点として描かれている。

世紀初にかけて、トンブリー王朝、バンコク王朝が東北タイ高原での戦役に用いたとされているものだが、これこそ要時にバンコク軍がたどる拠点ダーンを線でつなげた進撃ルート・マップである。

コラート高原の南の入り口ダーン・クントッドは、1768年にトンブリー王タークシンがビマーイの君をつぶそうと東北高原へ登った道であった⁵。テナセリウム山脈を越えてビルマにつながるダーン・チェディー・サムオン（スリーパゴダ峠の関）は、16世紀のアユタヤーのナレースワン王もビルマはホンサワディーのブレンノンも、18世紀のラーマ一世も通った道である。ナコンヤク川がブラチンブリー川に注ぐダーン・コブチェは1767年、アユタヤから逃げてきた将タークシンと部下たちを東海岸に逃がした関である。これらの「ダーン」の景觀に共通しているのは、広い世界につながる開放感であり、その雰囲気はダーンサーイにも満ちている。

ダーンサーイのサーイはタイ語で左である。これはアユタヤから見ての話であろうか。どこからでも、サーイと言えばメコン川の向こう岸の国だという見方もある⁶。

2.2 ダーンサーイの歴史

2.2.1 ヴィエンチャン王朝年代記

「関」であったダーンサーイは、まずヴィエンチャンの王朝年代記に現れる⁷。王都ルアン・パバーンがまだシェントーンと呼ばれていた頃、サヤチャカパット王（1456～1477）には6人の息子がいた。その一人、テンカム王子はムワン・ダーンサーイを治めていたが、1477年にベトナム軍がシェントーンを攻めた。応戦した兄たちは戦死し、父王はシェンカーン⁸に逃げる。ダーンサーイから馳せんじたテンカム王子は王都シェントーンからベトナム軍を追ひ払い、シェンカーンの父に使節を送り、王座に戻るよう勧めるが、父王は応じない。翌年、父王サヤチャカパットのシェンカーンでの客死後、テンカム王子はスワンナバンラン王として即位し1485まで統治した⁹。もともとサヤチャカパット王はシェントーンの王子でパーサク川上流域¹⁰を統治していた。マハーデヴィー王女の恐怖政治¹¹がシェントーンの宮廷を脅かし、王座を空白にした後、僧侶団の推戴を受けて王位についた経緯がある。パーサク川上流域のムワンを治めていたとは、ロムカオ、ロムサクあたりであろうか。パーサク河上流域のムワンを治めさせていた王子がシェントーンの王に推戴されたとすれば、その子がダーンサーイを治めても不思議はない。

岩盤が河床をつくるメコン川の中でもシェンカーンからヴィエンチャン区間は、とくに岩盤が高く大きく露出し、乾季には「これが川か？」と驚くような景観となる。西欧列強が乗り出して来る以前、メコン川は社会を分断する存在ではなく、その周囲に住民を集める存在であり、両岸は一つの共同体であった。

2.2.2 プラタート・シーソンラク仏塔

ダーンサーイの町外れ、マン川の淀みを見下ろす丘に、プラタート・シーソンラク仏塔が立っている。造営を記した碑文によれば、16世紀、ヴィエンチャンの王とアユタヤーの王は不可侵条約を結び、ここに仏塔を建てた¹²。ここから南の分水嶺を越えれば、パーサク川にしてもナーン川にしても、チャオプラヤー水系でアユタヤーの世界、北のホワン川と北東のメコン川はヴィエンチャンの世界である。ダーンサーイはもともと複数の世界の交わる場所、旅人の往来する通り道であり、軍隊の進撃路であった。それを証するのが、プラタート・シー・ソンラク仏塔である。

ダーンサーイの歴史を語る上で、シーソンラック仏塔は一つの要であるが、その縁起を記した石碑の解説は部分的にしかなされていない。現在仏塔前に置かれている石碑は1903年にダーンサーイがフランス領とされた際、フランス軍が運び去ろうとする原石碑を国守チャオ・ムワンが僧侶の助けを借りて写記したものである¹³。現在はヴィエンチャンのホー・パ・ケオ博物館に保管されている原石碑は、運搬時の事故で幾つかの片に割れ、破損がひどく、その解説は進んでいない¹⁴。

シーソンラク仏塔はダーンサーイの重要な名跡であり、この仏塔に人々が寄せる信仰の形態、儀式的叙述は本書の重要な部分を構成するが、建立の史実の詳細については歴史の項では触れないことにする。

ダーンサーイの精霊信仰の世界では、霊媒たち、セーンたち、ナーン・テンたちは仏塔建立後にその管理を託された者たちの子孫であると考えられている¹⁵。ダーンサーイは二国の王たちが友情を誓った地である。仏教で在家の守るべき五戒¹⁶の一つに「嘘を言わない」があるが、これは言葉と行

動の一致、発した言葉にそって行動すること、行動したことを真実に話すことである。パーリ語で *saccha* という。ダーンサーイの標語の一つに「ディンデーン・サッチャ」という言葉がある¹⁷。ディンデーンは境地の意味で、総じて「真実が語られた地」という意味の句である。

さて、仏塔建立後のダーンサーイについて考えてみよう。

2.2.3 現在のダーンサーイの住人たちとその移住の時期

言語学者は現在のダーンサーイの住民たちの核となる人たちは、その使用言語から、ルアン・パバーンから移住したとしている¹⁸。伝統と儀礼面から同じ起源とする説もある¹⁹。それらの説を尊重しながら、移住の時期についてダーンサーイを外界に結びつけた幾つかの事件をたどり、消去法で推察してみよう。

再び進撃ルート上のダーンとしてのダーンサーイに話を戻そう。中部タイから東北タイへの進撃とえば、18世紀後半にはトンブリー朝のヴィエンチャン攻撃（1779～80）がある²⁰。19世紀前半にはラーマ3世に反旗をひるがえしたアヌ王の乱の鎮圧（1926～29）²¹がある。いずれも、ヴィエンチャンへの進撃に際し、進撃路上のラーオ諸国を巻き込み、二者択一を迫った大きな戦いであったが、この二つの戦いにおいて、ダーンサーイへの道は使われていない。

ヴィエンチャン攻撃では、トンブリーからの軍は後にラーマ1世となるトンドゥワン（チャクリー（カサットスク）将軍）とブンマー（スラシー将軍）の兄弟に率いられていた。兄は先述のダーン・クントッドからコーラート高原に上がり、北にヴィエンチャンに向かった。弟はプラチンブリーからメコン川のコーンの滝の右岸に出て、川をさかのぼりケマラート、ナコンパノム経由でヴィエンチャンに達した²²。この戦争の結果、大勢のヴィエンチャン住民が捕虜として連行され、多くはサラブリーのパーサク河畔に住んだ。1826年にバンコクに反旗を翻したアヌ王の目的の一つは、サラブリーからヴィエンチャンヘラオ人捕虜たちを連れ戻すことであった。アヌ王は捕虜たちを連れてコーラート高原に登りタイ軍と戦った。馬に乗ったアヌ王が駆け抜け、挙兵したのはカラシン、ウドンターニーなど、18世紀にメコン川左岸からコーラート高原に移動してきたラーオ系住民の町であった。アヌ王につくか？ バンコク直轄のコーラートにつくか？ コーラート高原のラーオ人社会はどちらを選ぶかで2分（二者択一）されたのだが、その嵐にはダーンサーイは巻き込まれていない。当時の記録にダーンサーイの名は見当たらない²³。

19世紀初頭のムワン・ダーンサーイは、バンコクから見ても、ヴィエンチャンの側に立って見ても、ラーオはラーオでも、コーラート高原中部のラーオたち、南部のクメール、高原北のヴィエンチャンから移住したラーオ社会とは違っていった。ムワン・ダーンサーイは、長らく北部のムワンとして数えられてきた地であった。

2.2.4 ホー征伐に出兵したダーンサーイのチャオ・ムワン

ダーンサイの名が出てくる東北タイへの進軍は、チーン・ホー征伐²⁴のための出兵である。仏歴2416年頃（1873年頃）というどラーマ五世の治世になるが、チーン・ホーは兵をあげてムワン・チェンクワーン²⁵を奪った後、チェンカム²⁶の野に結集し、当時はタイ国の一部であったルアン・パバーンに攻め入ろうとした。

ここでダンサーイの歴史をひもとく伝手として、ダーンサーイのチャオ・ムワンとして19世紀後半、ラーマ5世時代に実存したことが知られているプラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）を登場させよう。

2418（1875）年ラーマ5世はルアン・パバーン守備のためピサヌロークで兵を募る。ピサヌロークの兵以外にスワンカローク近辺、スコタイ、ムワン・ピチャイの兵たちも応募した。ピサヌロークの配下の第四級のムワンであったムワン・ダンサーイのチャオ・ムワンであったプラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）は150名の兵をつのり、隊に加わった²⁷。

この戦いでタイ軍はルアン・パバーンを守備する。その後、バンコクからの兵をあげさせ援兵を得て、タイ軍はホーをチェンカムの野から退却させると、しばし防備にあたった。

2426（1883）年黄旗をかかげたホーが再び、ムワン・プワンの近くのチェンカムの野に戻ってきた。ラーマ5世はプラヤー・ピチャイ（ミン）とプラヤー・スコタイ（グルット）を長にピサヌロークからルワン・パバーンに出兵させた。ホーは陣地の周囲に竹矢来を巡らし、接近が難しい。陣地を攻められず、軍は進めなかった²⁸。

ここで、いよいよラーマ5世の懐刀の登場である。同じくモンの出自でもラーマ2世の母の兄弟を祖先に持ち、代々王家に使えてきたセーンシュート家のジェム・セーンシュートーは若い時から王のマレー行幸に随行したり、バーンパイン離宮に行く途中で王妃が水死の際にも王を慰め付き添った側近であった²⁹。

仏暦2428（1885）年ジェム・セーンシュートーはチャオムーン・ワイワラナート大佐としては王命を受けて、ホワパン・タンハー・タンホク地域³⁰に出兵する。大佐の指揮のもと、タイ軍はホーを包囲降伏させ、兵を失うことなく勝利した。ホワパン・タンハー・タンホク地域が静穏になると、2430（1887）年頃、チャオムーン・ワイワラナート大佐は帰国する。この功績により、大佐はプラヤー・スラサクモントリー少将に昇格し、後にチャオプラヤー・スラサクモントリー元帥となる³¹。

この戦いでプラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）は、ムワン・ダーンサーイの兵を率いておよそ12年間戦った。出兵したのはおよそ2420（1877）年で帰国は2432（1889）年である。チャオムーン・ワイワラナート大佐の隊とともに帰国した。同大佐が後にスラサク・モントリー元帥となつてからの伝記によると、進軍の経路はピサヌロークからウトラディットを経て、山越えてメコン左岸のパクラーイに出て、ルアンパバーンへ向かった。帰りも同じ道とある³²。

今回の出兵で、プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）は王に親しい軍司令官チャオムーン・ワイワラナート大佐から特別の厚情を寄せられた。後にラーマ5世は今回の遠征の指揮官たちに謁見を許し、位階と勲章を授けられた。ターオ・コンセーンもプラ・ケオ・アサーの官名と報奨品を受けた。

2.2.5 「山の幸」の集荷地：ダーンサーイ

プラ・ケオ・アサーは、正式にムワン・ダーンサーイのチャオ・ムワンとなった。

プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）の父マハーナロンは、ラーマ4世の治世（1851～68）ダーンサーイがピサヌロークに属する第四級のムワンであった頃、チャオ・ムワンと言われたが³³、その実は交易の采配をふるっていた実力者であったろう。

当時、ダーンサーイを取り巻く山々は、手つかずの原始林で、フタバガキ、チークなどのハードウッドの資源は豊富であった。樹木を倒して、木材にして、象に運ばせる。分水嶺を越えさえすれば、後は河が材木を運んでくれる。ナコンタイの道はクウェー河経由でナーン河へ、ペチャブーンへ運んだ木材はパーサク河でアユタヤー経由でバンコクへ運ばれた。外の世界で高く売れる「森の幸」は、他にもあった。ガム・トリーとも呼ばれるフタバガキ³³の樹脂は、防水剤に、たいまつ用に取れば取るほどに売れた。

タイ語でクランと呼ばれるベニガラムシ³⁴から取った樹脂も、染料、塗料、19世紀末からはエボナイト、食品添加剤にと用途が広がったが、これもダーンサーイ付近でよく取れた。ターオ・コーンセーンの父マハーナロンは、息子が20歳あまりになると、チャオ・ムワンの位を息子に譲り、自分はチャオ・ムワンの位が空席であったプー・クランに移った。プー・クランは、クラン（ベニガラムシ）のプー（山）の意味で、クラン栽培用の樹木がたくさん植えてあることからこの地名を得た。現在のローイ県プールワ郡である。父ナロンが逝去すると、ターオ・コーンセーンはプー・クランも自分のものとした。さぞかしベニガラムシが沢山採れたことであったろう。

ラオスからの移住は緩慢な幾つかの波であったのだろう。そして、その順路はホワン川からマン川河口に入るものであった。プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）も最初は現在のダーンサーイ村の北に位置するナーホーに棲んでいて、後に現在のダーンサーイの地に移住してくる³⁵。地形を見ても、ナーホーはマン河辺の扇状地が広く、米田が多いことから生活しやすかったのであろうと想像できる。ナーホー村のシーブーム寺院には、プラ・ケオ・アサーゆかりの家がある。地理の項で既述したように、ナーホーと比べれば高地のダーンサーイ郡庁所在地は河辺の段丘も高く、米田は少ない。しかし、山の狭間の「ダーン（関）の地」であり交易路であるから、人の往来は多く、商売には適していた。

ボウリング条約締結後、世界市場に向けて開かれたチャオプラヤー川下流のシャム湾の港では、クラン、木材など「山の幸」は高値で売れ、需要は未曾有であった。増大した「山の幸」の物流に従事する者たちは各地のダーンや駅市に移り住み、その数は増えた。ダーンサーイは19世紀後半に潤い始めた「かつてのダーン 今集荷地」の一つであったと考えられよう。

思えば、およそ40年の間、ベトナムからラオス、北タイ地方を脅かしたチン・ホーの乱もまた、山から海へ、海から山へと、雲南から流れる紅河、メコン川流域の物流の権利をめぐる武装集団の移動であり、戦いであった³⁶。その後期戦にダーンサーイから出兵した住民たちは、チン・ホーの移動より少し前にダーンサーイに住み着いていたであろう。ダーンサーイの人々が移住してきたのは、19世紀の中頃とは考えられはしないか？

2.2.6 行政改革とフランスの侵入

外憂内患と表現すべき内憂外患というべきか…19世紀も末になって、四方から押し寄せる外圧の中で絶対王政化を試みたラーマ5世の治世は生みの苦しみに満ちていた。周囲の国々が植民地化されていく中を、近代国家となるための行政改革を進めながら、ラーマ3世の時代に獲得した周辺部の地を英国に、フランスに手足を切るかたちで譲り、食べさせて、タイは生き残る。その時代の痕は周辺部であったダーンサーイの歴史に刻まれている。

チン・ホー鎮圧の際のタイ軍出兵に応じて出兵したフランスは、実力行使による既成事実を重ねて、タイ政府にメコン河左岸割譲への圧力を乗じる。その中でラーマ五世は1890年、地方行政の改革を始める。ラーオ地域と呼ばれた東北地方は四つの大範疇（ホムワン・ラーオ・4ファイー）に分けられた³⁷。ホワ・ムワン・ラーオ東部、東北部、北部、中部である。ホムワン・ラーオ・ファイー・ヌア（ラーオ地方北部）だけで54ムワンあり、ムワン・ダーンサーイはその一つとして、ムワン・ロムサクの下にあった。翌年に各地域に軍隊が派遣されるが、その際東部、東北部は一つになり、北部はラーオ・プワンと名称が変わった。ロムサクとその下に属するダーンサーイもモントン・ラーオ・プワンの一部となる³⁸。

1892年内務省が発足し、正式にモントンが行政単位として採用され、テーサビバーン制度が実施される。以降、ダーンサーイはモントン・ピサヌローク所属となった。しかし、翌年3月にはメコン左岸でフランス軍とタイ軍が衝突し、その賠償をめぐる両国の関係は悪化し、フランスは7月にチャオプラヤー川河口を突破してバンコクに軍艦三隻を停泊させ、パークナム（河口）を封鎖してしまう³⁹。フランスの要求を呑んで領地を失う中で、テーサビバーン制度の実施も遅滞として進まなかった。

大きな世界の変動は、辺境の地ダーンサーイにどんな形で痕を残したか。まずは先述の勇ましき国守プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）の伝記に戻り、ホー征伐から戻って、王に認められた国守としてダーンサーイを治めた彼の後半生をたどろう。

プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）は国守としてダーンサーイを統治し、民もそのもとで安寧であった。国守は寺院、本堂、仏塔、僧坊、寺院の壁などの建立を自ら率先して行った。バーンダーンのポーンチャイ寺、バーン・ナムテンのシーサアード寺、ダーンサーイ村バーン・ナーヴィエンのポーシー寺院、ナーホー村のシーブーム寺院などは彼の時代の建立である。プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）は住民にひろく敬愛され尊敬された国守チャオ・ムワンであった。ウバラート（副国守）は姉の息子トーンディーであった⁴⁰。

2442（1899）年プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）はターオ・トーンディー一行をピサヌロークに送り、公金をとどけさせる。前述のようにムワン・ダーンサーイはピサヌロークの管轄内にあったからである。

伝記によれば⁴¹、プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）はピサヌロークに行ったターオ・トーンディーより手紙を受け取る。手紙には納入すべき公金が10チャン⁴²足りないであった。政府はチャオ・ムワンを罰するという。プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）に急いで逃げて欲しいという趣旨であった。プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）はトーンディーに手紙を送り、問い正した。そんなはずはない。真実はどうなのか。戻ってきた使いが届けたトーンディーの手紙は逃げることを勧めるばかりであった。「公金が足りないのは事実で、いまさらその金を持ってきても無駄である。逃げるしかない。カー・ルワン⁴³がそちらへ出向くから、その前に急いで逃げるように」という趣旨であった。

プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）は親族会議を開く。皆はこの地にとどまり身の証を立てるように勧めた。プラ・ケオ・アサー（ターオ・コーンセーン）は一旦はその意を固めるが、身の辱めを避けるためと意を翻し、逃げることにきめる。6匹の象に乗って出立する一族を民は惜しん

で送った。

ターオ・コンセーンがホワン河を渡り、落ち着いたのは、ムワン・ケーンターオ（現在はラオス人民共和国内）の近くであった。ここでプラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）はチャオ・ムワンにまつりあげられ、「チャオクン・ハードデー（ハードデーの殿様）」と呼ばれた。バーン・ハードデーも村でしかなかったのが、ターオ・コンセーンのおかげでムワン・ハードデーと呼ばれるようになった。

プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）がハードデーに去った後、政府はターオ・コンセーンの甥であるターオ・トーンディーをダーンサーイのチャオ・ムワンに任命した。そしてプラ・ケオ・アサーの官名を与えたのである。プラ・ケオ・アサー（ターオ・トーンディー）はムワン・ダーンサーイ最後のチャオ・ムワンである。1906年、ムワン・ダーンサーイがローイ県ダーンサーイ郡となると布告されると、プラ・ケオ・アサー（ターオ・トーンディー）はダーンサーイ郡の最初の郡長となった⁴⁴。

プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）がハードデーに暮らして4年、2446（1903）年にダーンサーイはフランス領になってしまう。パクナム事件の結果占領されたチャンタブリーを失うことを怖れて、タイが交渉を続けた結果であった。タイはメコン川左岸ををフランスにゆずり、ダーンサーイも同領となった⁴⁵。フランスの手により、プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）は再びダーンサーイのチャオ・ムワンとして返り咲く。しかし、ダーンサーイとルアン・パバーンではフランスは満足しなかったらしい。プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）が3年あまり務めると、ダーンサーイは再びタイ領となった⁴⁶。2449（1906）年プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）は再びバーン・ハードデーに戻った。

2446（1903）年から2449（1906）年までダーンサーイがフランス領であった間に、フランスはシーソンラク仏塔の縁起を記した石碑を持ち去ってしまった。今日残る石碑はその写しである。その写しを制作したのは、プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）の指揮のもとプラ・クルー・ルン（バーン・ナムテンのシーサード寺住職）とバーンナートゥムのピアシリヴィセートが石碑に新しく写したのである⁴⁷。プラ・ケオ・アサー（ターオ・コンセーン）はバーン・ハードデーに戻り、終世そこで暮らした。他界したのは2462（1919）年、77歳であった。

2446（1903）年2月13日にフランス領とされたダーンサーイが、タイ領に戻ったのは、2449（1906）年3月23日で、フランス領であったのは3年と1月10日のことであった。

フランス領になったからと言って、良いことがあったとはどこにも記されていない。占領期はもっと長いチャンタブリーにあるようなフランス風建物や教会、ベトナム人も残っていない⁴⁸。

2.2.7 ダンサーイの日常：20世紀初頭

それはタイ領に戻ってからと同じであった。タイ領に戻ったからといってダーンサーイに何かよいことがあったかといえばそれは全くなかったと言って良いであろう。のんびりとした辺境の町は、まだ他地域との違いに気付いていず、住民たちは日々の暮らしを追っていた。

不満をいうのは、辺境に送られてきたと文句をいう役人たちだけである。おもしろい話がある。

かつてダーンサーイもその下にあったペチャブーンは、パーサク河畔の町で、分水嶺の向こうにあ

るダーンサーイよりははるかに便の良い地であるが、1899年のモントン創立から二回も廃止の憂き目を見ている。その理由も興味深いので紹介しておこう。

以下はチーム・ヴィパークボチャナキットの「プラヴァティサット・イサーン（東北地方の歴史）」のペチャブーンに関する記述の要約である⁴⁹。

チャンワット・ペチャブーンとその配下のムワン・チャイバダーン、ムワン・ブワチュム、ムワン・ヴィチエンは、かつてモントン・ナコンラーシマーの管理下にあったが、チャンワット・ペチャブーンは山地で原野が多く、人口は少なかった。バンコクや他のモントンからの交通は難しく、距離も遠い。どこのモントンに管理させても役人が通えない。それなら、独自に現地でやらせようというわけでモントン・ペチャブーンを創設したのであったが、政府にはこの町を繁栄させる金がなかった。力がない。交通手段はパーサク川だけで、それも乾季には水が涸れて沢山の貨物は運べない。またマラリアの流行する地である。当時はまだ医薬品に乏しく、派遣された官吏たちは長くいられない。繁栄させることが出来ないなら、モントンとしても恒久的に経営できないということで、政府は廃止命令を出した。そしてモントンに属する県（チャンワット）の行政をモントン・ピサヌロークにまかせた。ローイ県はウドンにまかせた、2443（1900）年のことである。2450（1907）年になって、モントン・ピサヌロークは、モントン・ペチャブーンから委譲された地を管理する便がないと報告する。ペチャブーンとロムサクは官吏が通って調べることは難しい遠隔の過疎地であると報告されている。政府はペチャブーンとロムサクの管理をモントン・ピサヌロークから外して、再びモントン・ペチャブーンを復活させた。このモントンは8年は続いたが、その後再び問題が出た。支出と歳入が見合わない。それをつぐなうには、国庫は貧しかった。というわけで経費節約のため、2458（2015）年再びモントン・ペチャブーンは廃止され、県の管理はピサヌロークに委託された。

以上から中央政府が、地方をどのように見ていたかが分かるであろう。チーム氏の父はかつて19世紀末から20世紀初にかけてウボンラーチャターニーでイサーン総督をしたサパシットプラソン親王⁵⁰の下でカー・ルワン補佐として働いた内務省官吏であった。親王の命令で諸地方から古文書を集めたという。その古文書をもとに書いたのが【東北地方の歴史】である。詳細な記述の行間から「文明開化期のタイ国内務省官吏の気概」のようなものが伝わってくる。テサビバーン制度の実施が現地ではどうであったのか、今や古典となりつつあるテート・ブンナーグ氏の著書⁵¹を補う良書である。

テサビバーン制度の実施者ダムロン・ラーチャヌパーブ親王⁵²は実務家であった。やる気も力もある内務省官吏のトップであった。親王の著書【ニターン・ボラカナディー（古い昔話）】にはペチャブーン国司を選ぶまでの苦労が記されている。ご自分のペチャブーン紀行も載っている⁵³。

1894年にペチャブーンに旅したダムロン親王はロムサク、ロムカオにも足を伸ばした。アユタヤーからの旅路は容易ではなかった。ダムロン親王は初代ペチャブーン国守の言葉として、「ペチャブーンへ行く道は三つある。一つはパーサクを船で遡行するルートでバンコクからおよそ30日。もう一つはサラブリー、あるいはロブリーから歩いて10日である。これは難儀な道で景色も特筆することはない。お勧めは、バンコクから動力船で（ナーン河）7日かければピチット県ミュンラナーグ郡につく。そこから陸路で4日でペチャブーンに到着する。」ダムロン親王は第三のルートで22日間かけてペチャブーンに達し、帰路はパーサク河を下り、サラブリーからは鉄道を利用している⁵⁴。

初代の内務大臣になった王子と地方に左遷された思いの役人とは思っても違わず、待遇も違うであろう。しかし、同時期にインドやビルマの奥地で勤務していた大英帝国の官吏たちと比べると、東北地方北西部というか北部の東というか、ペチャブーン、ロムサクに対してタイの内務省官吏たちがやる気に欠けていたと思えるのはしかたがないであろう。

ダーンサーイに話を戻すと、現在の住民の最大の悩みは住んでいる土地、耕している田に関する書類がないということである⁵⁵。それは一つにはこの50年に激増した流入人口と国有林の占拠であるが、もう一つは「四代にわたって住んでいる土地が登録されていない」とか「先祖代々住んでいる村全体が国有林の中にあって、誰一人土地を登録できていない」問題である。これは100年前に内務省から派遣された官吏たちが自分の足で歩いていけば、防げたであろう。ダーンサーイ郡は総面積の80%が国有林⁵⁶とされるが、その中に代々住んできた人々の顔を見ることなしに、政府が紙の上だけで計算した数字に思える。

内務省の役人の無気力以外にも、原因はあった。それを言わないと、不公平であろう。20世紀ともなれば、河川には蒸気船が入っているし、鉄道も敷設されるということで、タイの中部は賑わった。それ以遠の北部や東北タイといえども、交通の便は改善されていった。イングラムが語る東北タイ南部の著しい経済成長⁵⁷は鉄道が生んだものであった。30年前のホー征伐の頃にはどこも不便であったタイの東北、北部であったが、20世紀初には、地域によって格差が生じてきたのは否めない。

それにしても、ラジオも聞こえないところで、新聞の配達もないところで、格差感が住民に伝わらなかったことは救いであった。彼らは、他地方の人々と自分たちを比べることもなく、日々の暮らしを追っていた。

貧困とか不満は、相対的な問題である。20世紀後半にダーンサーイの抱えた問題はそれであったが、今はここで歴史から少し離れよう。



写真1 毎年タイ暦6の月の十五夜にプラタート・シーソンラク仏塔の供養が行われる。信者たちの捧げるトン・ブン（蠟燭の木）の数は多く、仏塔が埋められるほどだ。

3. ダーンサーイの実践宗教

タイ北部、東北部では、都市部、農村部を問わず、伝統的に精霊信仰が行われてきた。時代の流れとともにその風習が廃れつつある地域もある中で、ここダーンサーイでは、精霊信仰は盛んに実践されており、集まる信者たちの数は年を追って多くなっている。また、精霊信仰の儀礼を行う霊媒と従者、信者たちは、伝統的に仏教行事の実践の責任も担ってきた。

かつての関の町ダーンサーイには、アユタヤーの王とヴィエンチャンの王が友情の印として建立したという仏塔プラタート・シーソンラクが存在することは既述したが、その管理は伝統的に霊媒たちにまかせられてきた。1年に一度の仏塔祭りは何千という信者を全国から集めて行われる。精霊信仰の実践者たちは、また、仏教行事の熱心な実践者であり、多くの仏教年次行事において、檀家総代、あるいは世俗者代表として、儀式的中心となっているのだ。

雨季入り前に行われるブン・ルワン行事のピーターコン祭りは、1980年代からタイ観光庁を通して宣伝され、テレビ、新聞などのメディアにより全国に知れ渡った。仮面をつけたお化けピーターコーンの祭りは、今ではダーンサーイの重要な観光行事となっている。ダーンサーイのテサバーン（市役所）もアムパー（郡役所）も特別の予算を組んで、この観光行事に参加している。

こうした官による「祭礼化」現象とは裏腹に、ダーンサーイでは、もとの信仰実践者たちの信心は衰えず、ある部分では「祭礼化」を拒否し、それと平行して自分たちの伝統的祭りを継続し、またあるところでは、それに和して、伝統的行事を盛んに行っている。その基盤には、きめ細かく心をこめた毎日の精霊信仰、仏教儀礼の実践がある。

精霊信仰が脚光を浴びるにつれ、それに対する仏教側からの抵抗、批判も強くなった。もともと、仏教の戒律には精霊信仰の慣習と相容れない部分がある。その「折合いをどうつけているか？」……ダーンサーイにおける精霊信仰と仏教信仰の実践を記述した後で、矛盾をはらんだ現況を考えてみよう。

以降、筆者が「ダーンサーイでは」という場合、狭義では行政村（タムボン）ダーンサーイを、広義ではダーンサーイ郡を意味するものとする。ダーンサーイ郡は10のタムボンから構成される。2009年の数字で、郡の総人口は51,237人である。10のタムボンの人口を比べてみると、ダーンサーイ郡庁所在地にあるタムボン・ダーンサーイの人口は6270人で最大である⁵⁸。

ダーンサーイ郡にはまた二つのテサバーンがある。テサバーン・ダーンサーイとテサバーン・シーソンラクである。

3.1 ダーンサーイの祭礼行事暦

ダーンサーイの祭礼の暦は、グレゴリオ暦1月1日に始まる西洋暦ではなく、およそ11月の末から12月初に始まるタイ暦に従っている。タイ暦は王室事務局が発表する。暦は12か月からなり、ドワン・アーイ、イー、サーム、シー、ハー、ホク、チェット、ペット、カオ、シップ、シプエット、シプソーンの12か月である。年によりドワン・ペット（8月）が二回ある年がある⁵⁹。

ドワン・アーイ（1の月）の白分第一夜から始まるタイ暦は、満月の白分十五夜を月中ばにして、黒分の十四夜で終わる。翌日はドワン・イー（2の月）の白分の第一夜となる。今年（2011）年のドワン・アーイの白分第一夜は、西洋暦では2010年12月8日であった。2012年のタイ暦は西暦2011年



写真2

11月26日から始まる。筆者はかつて日本に滞在していた時、タイ暦のドン・アーイ（1の月）の初日が歌舞伎の顔見せ興行の始まりとほぼ一致しているのに気づいた。師事していた日本文学の松崎仁教授から周正月という言葉を教えていただいたのもこの時である⁶⁰。

タイ暦12か月に行われる祭礼行事は、仏教行事と精霊行事に大別できるが、チャオ・ポー・クワン、ナーン・ティアム、セーンたち、ナーン・テンたちと信者たちは、その両方で、代々祭りの実践の任務を担ってきた。

3.2 ダーンサーイの精霊信仰

3.2.1 先人の研究の轍を踏んで

精霊信仰は、タイ語でピーと呼ばれる精霊を礼拝する信仰である。ピーには様々な範疇、レベルがあるが、ここでは共同体を守護する守護霊の信仰を主体にとりあげる。タイ北部、東北部そしてラオスの共同体守護霊は、ピー・バーン、ピー・スア・ムワンとして報告されてきた⁶¹。東北タイ北部の精霊信仰の調査と言えば、まずあげるべきはS・J・タムバイア氏の「東北タイにおける仏教と精霊信仰」である⁶²。しかし、調査方法及び技術の違いに入るまでもなく、ダーンサーイの共同体守護霊はタムバイア氏の報告したウドン県ムワン郡バーンプラーンムワン村の守護霊と大きく性格が違うのであまり参考にならないことを述べなければならない。タムバイア氏の報告する守護霊は沼や山など自然と結びついたものであるのに比べ、ダーンサーイの守護霊はピー・チャオナーイ（貴人の霊）である。貴人の霊はタイの守護霊信仰の一つの流れをなし、東北タイの他の地域にも見られる⁶³。又、「共同体の外から来た人の霊」という意味では、林行夫氏の報告するマヘーサック霊⁶⁴にもつながっている。

田辺繁治氏の王権と精霊信仰についての業績は価値あるもので、筆者も本研究に際してよく読ませていただいた。ダーンサーイの精霊信仰には田辺氏の一連の論文⁶⁵で論じられたような王権との結び

つきはないし、そこで論じられているような段階的な融合と分裂も存在しない。王権についてさらに言葉を継ぐと、ダーンサーイにはシーソンラク仏塔建立をめぐるアユタヤーとヴィエンチャンの王たちについてのタムナーン（伝承）はある。それが双方の都を志向することなく存在するのは、二国の間の関という土地柄故かも知れない。

田辺氏のE・R・リーチについての言及は、興味深かった⁶⁶。筆者もまた、リーチ氏の轍の痕をたどる一人である。アプローチとしては、リーチ氏が情熱を持って書かれたように、弁証的アプローチを採択するつもりであるが、それは田辺氏の弁証法的歴史学アプローチとは違う。リーチ氏の *Dialectic in Practical Religion* 「実践宗教の弁証法」は1968年に出版され、筆者が読んだのは1970年のリプリント版であった。その後10何年かして田辺氏が【神々の弁証法】を書かれた。その題名に惹かれて「あら、リーチだわ」と読んだ論文であったが、実践宗教の重要性は分かったが、弁証法的アプローチについては触れておられず、正直言って、どこがリーチなのか分からなかった。その思いは後の研究⁶⁷にも感じたことである。もう日本の宗教人類学界はリーチを越えたのかも知れない。それを筆者が知らないだけなのかも知れない。

しかし、1968年に戻って、筆者が大事にしたいのは、実践宗教の儀礼を観察する際の弁証法的見方である。リーチはヘーゲルをひいて「内在する矛盾がアンチテーゼとなり、対立が起こり、やがてシンセシスを生む」⁶⁸と書いている。宗教においては、この対立が要である。聖と俗、聖の中でも仏教と精霊信仰が聖とするものの区別。この峻別が宗教性を生む。対立のないところ、峻別のないところ、あいまいなところに宗教は育たない。儀礼はその「微妙な弁証法的区別」だとリーチは教えていると、筆者は読んだ。ここで大事なのは、弁証法による歴史の流れではなく、実践者の「最も微なる弁証法的な区別」⁶⁹である。これが行為の選択となり、信仰の主張となる。己と他者…それはダーンサーイの精霊信仰の場合、仏教であるが、…を区別し、自分の信仰を貫くこと…これが「宗教的」ということなのだと考える。

筆者がダーンサーイの実践宗教に見たのは、この自己と他者の峻別であり、その表現である。今回の文では儀礼の細かい描写はしないし、実践宗教のありかたもその範疇ではないが、筆者の基本的スタンスとして記しておきたい。

3.2.2 聖なる祠

ダーンサーイ郡庁所在地に共同体守護霊が宿る祠は、4カ所ある。森に2カ所、村内に2カ所である。森の祠の一つはホー・ルワン（大きな祠）で、プラタート・シーソンラク仏塔のある丘のふもと、仏塔より東北に50メートルほど離れた地点にある。ダーンサーイ郡庁所在地の地図1を参考にさせていただきたい。

ここはかつては大きな竹の生い茂る野であったが、この30年の間に舗装道路が敷設され、車で往来できるようになった⁷⁰。野という表現は妥当ではないかもしれない。理念的な「野」と考えていただきたい。ここにはチャオ・ムワン・ワン、チャオ・ムワン・クラーン、チャオ・オン・タイ、チャオ・オン・ラオなど共同体を守護する貴人の霊の宿る複数のホー（祠）がある。もう一つの野の祠はホー・ノイ（小さな祠）で、ダーンサーイ村バーンダーンの西、ソーク川の右岸にある。このホーに宿る精霊たちの中で指導格の霊魂は、チャオ・セーン・ムワンである。



写真3

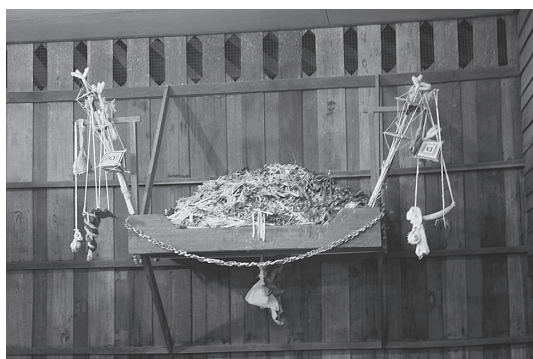


写真4 チャオナーイ（貴人）の霊がおわしますヒン（神棚）は、信者が捧げた蠟燭で重い（左）。1年に一度、リヤン・バーンの祭りで蠟燭は下げられ、ヒンは洗われる。ヒンの底板の裏には竹帯で編んだター・レオがつけられる。魔除けである（右）。

村にはヒン（神棚）を備えた家々があつて、聖なる靈魂はそこにも宿る。そうしたヒンの内での主格は、男霊媒チャオ・クワンの家のヒン（神棚）である。現在のチャオ・クワンの家はダーンサーイ村ムー・3のバーンダーンにある。地図を参照されたい。

クワン、あるいはチャムという語はラオスから東北タイにかけて広がるラーオ族社会の精霊信仰において、男性霊媒を指す言葉である。日本語で司祭と訳している書物⁷¹もあるが、どうであろう。ダーンサーイではチャオ・ポー・クワンは司祭ではない。ナーン・ティアムはメディアであると考えられるが、二人の機能の違いはまだ筆者にはつかめていない。現在のダーンサーイでの二人の姿がプロト・タイプとは思っていない。この点についてはこれから他地域での事例を知りたいと思っている。

通常、東北タイでは、クワン、チャムの語は相互交換可能に使われているようだ。ダーンサーイを



写真5・6 アムパーとテサバーンそしてタイ観光庁が合同で行うピーターコン祭りは「祭礼化」している。晴れがましい行進に参加するチャオ・ポー・クワン（右）とチャオ・メー・ナーン・ティアム（左）それぞれセーン、ナーン・テンが侍っている。



写真7 ピーターコン祭りでは、チャオ・ポー・クワンは親戚やセーンたち、信者たちとともにボーンチャイ寺の境内を三回左にまわる。チャオポーと同じように長髪に鉢巻きをしているのはナーホー村のクワンだ。

囲む村々にも、それぞれのレベルでクワン、チャムは存在し、彼らは家にヒンを持ち、村人の需要に応じて、機能を果たしている。そしてダーンサーイで精霊信仰の祭りがあるときには、馳せ参じる。ダーンサーイの霊媒チャオ・ポー・クワンと彼らの間には、主従関係があるように見える。

ダーンサーイの守護霊チャオ・ムワン・ワンが憑く男霊媒は、常にチャオ・クワン、あるいはチャオ・ポー・クワンと敬称チャオをつけて呼ばれてきた。「憑く」という現象はタイ語では「カオ・ソン」と呼ばれる。チャオ・クワンの選定、任命は守護霊チャオ・ムワン・ワンの霊ヴィンヤーンがチャオ・クワンの身体に「憑く（カオ・ソン）」ことによって決まる。チャオ・クワンが選ばれる段取りは通常以前のチャオ・クワンが死去あるいは不的確ということで辞任させられてから、その子あるいは孫などが嗣ぐこととなる。

チャオ・クワンの家のヒン（神棚）について述べよう。写真（写真4）を見ていただきたい。家屋への入り口から向かって奥正面を背にして寝床が敷かれ、そのホワ・ノーン（枕の上）にヒン（神棚）がある。ヒン上には木製の象と馬、花を載せるパーン（高台）などのクルアン・ブチャー（儀礼用具）がおかれている。ヒンの下には、竹で編んだターレオ（邪悪の目）⁷²（写真4（右））が一つつけられている。ヒンの脇には武器、楽器がおかれている。この棚に宿る貴人霊は、チャオ・ムワン・ワンで、脇にチャオ・セーン・ムワンのヒンが小さくつくられているが、これは客分のヒンであるとされている。

チャオ・クワンの着衣は一般の村人とは違う。髪の毛は長く伸ばし、頭部に常に白い布を巻き、チョンカベンをはき、白い上着を着ている。チャオ・クワンは年次の精霊信仰行事の他に、信者の請いにより「カオ・ソン」して病気の理由などを精霊にうかがうこともある。

女霊媒ナーン・ティアムの家は現在、ダーンサーイ村のムー2ノーンコーンにあり、その家の奥正面の寝床のホワ・ノーン（枕の上）にヒンがある。ヒン上には花を置くパーン（高台）、酒瓶などの祭具（クルワン・ブチャー）が置かれている。棚下に竹で編んだターレオがつけられているのは、男霊媒師の家のヒンと同様である。ヒンの脇には武器と楽器が置かれている。ナーン・ティアムの家のヒンにおわします貴人霊は、チャオ・ムワン・クラーンという名の女性の霊である。

女霊媒はナーン・ティアムと呼ばれる。その任命は、チャオ・クラーン・ワンがチャオ・クワンにカオ・ソンして選ぶ。ナーン・ティアムの座が空席となると、通常選ばれるのはチャオ・クワンの場合と同じく、前任者の娘あるいは縁者である。ナーン・ティアムはチャオ・クワンと同様に「カオ・ソン」する役目を持つ。髪の毛は頭上にまげに結び、腰布パートゥンをまとい白い上着を着ている。ナーン・ティアムを村人たちは、チャオ・メー・ナーン・ティアムと呼ぶ。

以上に宿る守護霊たちを村人たちは「チャオ・ナーイ」（貴人、王侯）と呼ぶ。かつてダーンサーイと何らかの縁を持っていた高貴なる方々という意味である。タイの精霊信仰の一つの流れに「チャオ・ナーイ（貴人、王）」信仰があり、ダーンサーイの村の守護霊はその系列に属することを指摘しておきたい。

3.2.3 霊魂の従者（カー・ファオ）たち

精霊がチャオ・クワンやナーン・ティアムに憑く（カオ・ソン）際にカー・ファオ（仕える）の任にあたる者たちをセーン（大臣）と呼ぶ。それぞれ役目が定められており、一年を通しての精霊行事でその役目を務める。また1年を通して信者の願いに応じてボン（カーン・ボンバーン（願掛け））の儀式とケー・ボン（カーン・ケー・ボン・バーン（願がかなったお礼参り））儀式を執り行う。またホー・ルアンとホー・ノイの守護霊祠ホー・チャオを保守する役目を持つ。チャオ・ポーの命に従って、プラタート・シーソンラク仏塔とその周辺も管理する。

セーンの選定はチャオ・ムワン・ワンがチャオ・クワンにカオ・ソンして行う。チャオ・ムワン・ワンが選んだ人の手首にチャオ・クワンは綿糸を結び、肩にサバーイ（肩布）がかけて、任命の儀礼はおわる。セーンになれるのは男性のみである。チャオ・クワン側の守護霊チャオ・ムワン・ワンに仕えるセーンは10人、チャオ・ナーン・ティアム側の守護霊チャオ・ムワン・クラーンに仕えるセーンは9人である。

チャオ・ナーン・ティヤムにはこの他に、ナーン・テンと呼ばれる女性の従者が4名つく。ナーン・テンはチャオ・ムワン・クラーンがカオ・ソンしたナーン・ティヤムが選り、手首に綿糸を結び肩布をかけて就任させるのだ。

次号に続く

註

- 1 1987年に日本の無償援助でバンコクのラチャダピセク通りに建てられたスーン・ワタナタム・ヘーン・プラテート・タイは英語ではThailand Culture Centerと訳され、日本語ではタイ文化センターと呼ばれている。ついでのことながら、文明(Civilization)はタイ語ではアラヤタム อารยธรรม, 芸術 (fine arts) はシンラバ ศิลปะと訳されている,
- 2 2.2.5参照
- 3 Thi Thamkan Pokkroong Amphur Dansai, Banyai Sarub Amphur Dansai Changwat Loei, 2553 (ローイ県ダーンサーイ郡行政管理事務所編「ダーンサーイ概要」2010年度版)
- 4 Santanee Phasuk and Philip Scott, *Royal Siamese Maps War and Trade in Nineteenth Century Thailand*, River Books, Bangkok 2004
- 5 1767年アユタヤー滅亡後のタイに割拠した「コック」(国)の一つであったビマーイにはアユタヤの王子テープビビットがこもり、ビマーイの君(チャオ・ビマーイ)と呼ばれていた。
- 6 MomChaoying Phunphismai Disakul 'thiau' Phainai Barn Rao, Bkk 1970 (ビブンピスマイ王女著「国内を旅する」1970 M.C. Phathanayu Disakul の72歳記念布施本) p. 64
- 7 Viravong, Maha Sila 著 Sommai, Premjit 訳 "Prawatsat Lao", Sinlapa Wattanatham Chababphiset, Matichol, Bangkok 2540
- 8 現在のタイ国ローイ県チェンカーン郡庁所在地の対岸のメコン河左岸にあったムワン, 19Cのバンコク王朝の行軍用地図(注4参照)にも位置が示されている。
- 9 Viravong, Maha Sila 前掲書, p. 73
- 10 即位する前はハウエイ・パーサク(パーサク河)の近くに住み、ブラヤー・クワー・パーサクと呼ばれていた。サームセンタイ王とアユタヤーの王女の間に生まれたとされる。同掲書 p. 68
- 11 サームセンタイ王の後で王の死後養子と通じ、彼を王座につけようと即位した王たちを次々と暗殺し、王都を恐怖のどん底に落としたと伝えられる。最後に重臣たちにより処刑される。サームセンタイ王の娘、妹とする説もある。同掲書 p. 65, p. 130 註35
- 12 Krom Sinlapakon Charuk nai Prathetthai Lem 5 Krungthp Kanphim 2529 (芸術局 タイ国内の碑文5 Bkk 2529 p. 282-8)
- 13 詳細は2.2.6参照
- 14 マハー・シーラ・ヴィラウオンの「ヴィエンチャン王朝年代記」初版は英訳 the U.S. Joint Publications Reserach Services, *The History of Laos* by Maha Sila Viravong, Paragon Book Reprint Corp. New York 1964 では建立はスリヤヴォンサー王の治世, 1670年に建立が開始され, 1673年に完成したとしている。p. 77-8 後のタイ語訳本では建立はセーターラージ王の治世で1540年に開始され, 1543年に完成されたとしている。p. 93 Sila Viravong, Sommai Premjit trans. Pravatisat Lao SINLAPAWATTANATHAM, MATICHOL BKK 1996
- 15 セーン, ナーン・テンについては3.2.3参照
- 16 (1) 不殺生 (2) 不偷盗 (3) 不邪淫 (4) 不妄語 (5) 不飲酒 中村元監修 アジア仏教史 インド編II【原始仏教と部派仏教】佼成出版 東京 1975 p. 131
- 17 Samnakgan Wattanatham Changwat Loei, *Phrathat Sri Songrak Loei* 2004 (ローイ県 県文化事務所編「シー・ソンラク仏塔」ローイ, 2004)
- 18 Brown, J. Marvin, *From Ancient Thai to Modern Dialects*, Social Science Association Press of Thailand 1965 Bangkok p. 90-94
- 19 Toem Vipahkphochankit, *Prawatsat Isan*, Samnakphim Tamassat lae Muniti Khrongkan Tamrasangkomsat lae Manutsat 2546 (イサーンの歴史) p. 270
- 20 このヴィエンチャン攻撃でカサットスク將軍が持ち帰ったのが現在のタイ国王室を守るブラ・ケオ仏(俗称 エメラルド仏)である
- 21 タイの歴史教科書ではkhabot(反乱)と呼んでいるが, ラオスではシャムとのソンクラーム(戦争)としている,
- 22 *Phraraj Phong Sawadan Chabab Hattaleka Lem 2, Chao Krung Thonburi*, Charen Tham Bkk 2516 (御親筆トンブリー 王朝年代記 p. 230-237)
- 23 Chao Phrayathipakarawoang Kosatibodi, *Phraraj Phongsawadan Krung Ratnakosin Rajakan thi 3* (ラーマ3世王朝年代記) Krom Sinlapakon, bkk 2547 p. 17
- 24 19世紀後半ベトナム, ラオス, タイの北部に侵入し暴虐したホーと総称される華人武装集団
- 25 現在のラオス人民民主共和国シェンクワーン省中心は現在のムワン・コウン, プワン族の大きなムワンであった。

- 26 シェンクワーン省の平野，ラオス中部からベトナム中部へ降りる交易路の途中にある。埋葬用の大石壺が無数に残る地が多いことからジャール平原 (Thung Hai Lao) の名でもよばれている。
- 27 San Saratasunanan, *Phrawat Dansai lae Phra Keo Asa* (ダーンサーイの歴史とブラ・ケオ・アサー (ターオコーンセー)) 2546 2月 ローイ p. 15
- 28 同掲書 p. 16
- 29 Chomphon Surasak Montree, Phuan Akson 1964 p. 583 「スラサク・モントリー元帥」プアnakソン社，バンコク 1964
- 30 シブソンパンナーとシブソンチュタイとルアン・パバーンに挟まれた地域 伝説ではブータイ族がタイに渡来したルート上の都市国家群である。
- 31 Phiphitaphan Kong Thahanbok Chalemphrakiat (陸軍博物館 (案内書)) p. 78,
- 32 Chomphon Surasak Montree, 前掲書 1964 p. 586
- 33 Dipterocarpus 科の樹木，ハードウッドで建材，船材の他に樹脂が広範囲に利用される。
- 34 ラックカイガラムシ *laccifer lacca* (ker) の体表から分泌され凝固する樹脂状物質。樹脂分，ワックス分，色素分に分けられ，工業的に利用されている。
- 35 San Saratasunanan, 前掲書
- 36 1864年 黒旗軍は紅川流域に入り交易を独占。黄旗軍は中ベトナムからメコン地域に入り，ヴィエンチャン，ルアンパバーン及び北タイに侵攻した。
- 37 Toem vipahkphochankit 前掲書 p. 300-317
- 38 プワンと呼ぶ理由は 1993年のバクナム事件当時 コーン川左岸の多くのムワンは ラオ・プワン族の大ムワンであるシェンクワーンを始めとして，バンコクからシャム政府が送ったタイ官吏の監督下にあった。事件後 左岸を失ったタイは住民を右岸に移動させる。そのうちプワン族の数が多かったので，ホムムワン・ラーオ・ファーマの名称は モントン・プワンと変更されたという説明である。Toem vipahkphochankit 前掲書 p. 343
- 39 Utichai Munsinl, *Vikurit Karn R.S.W.112* (ラタナコーシン暦112年の危機) Bookcode 04-B112
- 40 ウパラートはラーオ系諸ムワンの伝統的行政職で国守の次のNo. 2である。この場合位階の継承 (SUCCESSION TO OFFICE) を父系でなく姉の息子がしていることに注意。父系の女を通しての地位の継承は現在のダーンサーイの精霊信仰集団の中でも顕著である。
- 41 San Saratasunanan 前掲書。この事件については バンコクの国立古文書館にも公文書が残っている。Toem vipahkphochankit はウパラート側の陰謀としている 前掲書 p. 279
- 42 1チャンは銀80パーツ分
- 43 国王から派遣されたムワンの長官。この場合はモントン・ピサヌロークの長官。
- 44 任期は2449~2452 (1906~1909) 歴代のダンサーイ郡長表による。San Saratasunanan *Tamnan Phratat Sisongrak Lae Amphur Dansai Loei* 2539
- 45 村嶋英治「タイ近代国家の形成」p. 408 石井米雄 桜井由躬雄編 東南アジア史 大陸部 山川出版社 1999
- 46 フランスは1904年条約で獲得したトラート，ダーンサーイの他にアジア人保護民裁判権もタイに返し，代わりにバットン。シェムリアブ，シーソポンを得た。(1907年3月23日に調印)
- 47 San Saratasunanan 前掲書
- 48 フランスのチャンタブリー占領は1993年7月から1904年まで約11年間であった。
- 49 Toem Vipahkphochankit 前掲書 p. 282-283
- 50 プラチャオ・ボロム・ウォンター・クロム・ルワン・サバシットプラソン親王 モントン・イサーンのカールアン (総督) 在任1893~2015
- 51 Tej Bunnag, *The Provincial Administration of Siam 1892-1915 The Ministry of the interior under Prince Damrong Rajanubhab* Oxford university press/DK Book House Bangkok, 1977
- 52 ソムデット・クロム・ブラーヤ・ダムロン・ラーチャヌバブ親王 ラーマ四世の第57兄。内務大臣として働き，異母兄ラーマ5世の念願であった地方行政改革を徹底させた。生，1862~1943
- 53 Somdet Krom Phraya Damrong Rajanubhab, Ruang Kwaamkhai Muang Petchabun, Nithan Boranakadee, 「ペチャブーンの熱病の話」ニターン ボラナカディー BKK 2485 p. 154-173
- 54 同掲書 p. 158-161,
- 55 Thi Thamkarn Pokkrong Amphur Dansai, *Banyai Sarub Amphur Dansai Changwat Loei*, 2553 (ローイ県ダーンサーイ郡行政管理事務所編 [ダーンサーイ概要] 2008
- 56 Phenthi Yutasart Amphur Dansai Changwat Loei, 2006
- 57 Ingram, James C. *Economic Change in Thailand 1850-1970* Stanford Univ. press 1971
- 58 Thi Thamkan Pokkrong Amphur Dansai, *Banyai Sarub Amphur Dansai Changwat loy*, 2553 (ローイ県ダーンサーイ郡行政管理事務所編 [ダーンサーイ概要] 2010
- 59 Dr. Prasert na Nakhorn, *Prawatisat Betalet*, Sinlapawattanatham bkk 2006 p. 330

- 60 中国の周王朝における暦では年始正月を「冬至を含む建子の月」の朔日とした。
- 61 Condominas, George, *Phiban Cults in Rural Loos* ed. By Skinner, William & kirsch, A. Thomas, Change and Persistence in Thai Society, Cornell Univ. Press 1975 San Saratasunanan, Tamnan Prathat Sisonrak lae Amphu Dansai Rungsengturakit Phim Loei 2539, 田辺繁治「ランナータイにおける環境認識」
- 62 Tambiah, S.J. *Buddhism and the Spirit Cults in North-East Thailand*, Cambridge 1970
- 63 Anubol Shiriphant *Phi Chaonai*, Siam Araya Phi Thi 3 Chabab 29 Siam Society
- 64 林行夫 第八章 宗教 ラオス文化研究所編「ラオス概説」めこん 2003 p. 226
- 65 田邊繁治「ランナータイにおける環境認識」,「神々の弁証法」,「実践宗教の人類学」,「供犠と仏教的言説」
- 66 田邊茂治「神々の弁証法」佐々木高明編「雲南の照葉樹のもとで」1984
- 67 田邊繁治 序章 第一章「供犠と仏教的言説」北タイのプーヤ・ヤーセ精霊祭祀「実践宗教の人類学—上座部仏教の世界」京都大学出版会1993
- 68 Leach, E. R., Introduction, *Dialectic in Practical Religion*, Cambridge 1968 p. 1-2
- 69 同掲書 p. 2
- 70 霊媒師ターヴォーン・チュアブンミー氏より聞き取り 2011 6月
- 71 林行夫 前掲書 p. 226
- 72 竹帯を六辺形に折ったもので 網目が7つある。邪悪のビーの侵入をふせぐ。家のまわりにつける。精霊祭の時には 村への入り口につけ 外部からの出入りをとめた。詳しくは 岩田慶二 ホービー（精霊の祠）について…東南アジアにおける仏教以前の信仰…民族学ノート, 1963